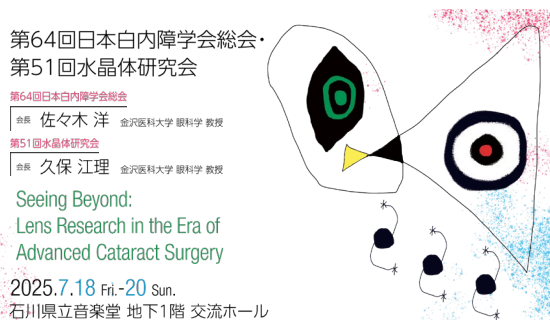


総会・研究会 開催報告

タイトル 第 64 回日本白内障学会総会・第 51 回水晶体研究会報告

久保 江理

金沢医科大学眼科学



2025 年 7 月 18 日から 20 日まで、石川県金沢市の「石川県立音楽堂」にて、第 64 回日本白内障学会総会・第 51 回水晶体研究会が盛大に開催されました。本年の白内障学会会長は金沢医科大学眼科の佐々木洋先生、水晶体研究会会長は私・久保江理が務めました。幸い天候にも恵まれ、会場は活気に満ち、熱のこもった発表や討論が繰り広げられました（図 1）。参加者は 312 名に達し、コロナ禍以前の規模に回復したことも印象的でした。

今回の総会テーマは「Seeing beyond: Lens research in the era of advanced cataract surgery」で

す。白内障手術の進歩により術後成績が飛躍的に向上した現在にあっても、なお水晶体研究の重要性と将来性を語り合いたいという思いを込めて設定されました。このテーマは学会全体に反映され、白内障や老視改善をめざした基礎研究から薬物療法、さらには手術治療に至る幅広い講演が展開されました。

特別講演 1 では、老視・白内障研究の世界的権威である University of Auckland の Paul J. Donaldson 先生が、「Lens water transport regulation: a new strategy to treat presbyopia and cataract」と題して講演されました。水晶体内の水輸送に着目した老視・白内障発症メカニズムと、その治療応用に至る研究成果が紹介され、参加者に大きな示唆を与えました。

教育講演では、窪田製薬ホールディングス株式会社の窪田良先生が「2050 年への警鐘：世界が直面する近視の脅威と解決策」と題し、近視の疫学、薬物療法、そして新たに開発された近視進行抑制眼鏡「Kubota Glass」に関する最新の知見を提示されました。今後の臨床応用を見据えた講演は、多くの聴衆の関心を集めました。



図 1：学会会場にて

また、白内障学会の恒例行事である学術賞受賞講演も開催されました。本年度は基礎部門で近畿大学薬学部の大竹裕子先生、臨床部門で金沢医科大学医療技術部の鶴飼祐輝先生が受賞され、これまでの研究の歩みや苦労話を交えて講演されました。両先生の今後ますますのご活躍が期待されます（図2）。



図2：学術賞表彰式

シンポジウムでは、白内障学会と水晶体研究会の合同企画をはじめ、多彩なセッションが設けられました。特に今回は、事前に評議員・理事へのアンケートを実施し、聞きたい研究テーマに基づいて演者を選出した「君のはなし（研究）が聞きたい」というシンポジウムが開催され、例年にない新しい試みとなりました。

一般講演では、ベテランから若手まで積極的な発表や質疑応答が活発に行われ、熱い講演会場となりました。セッションごとに優秀演題賞が選出され、懇親会と最終日に表彰されました（受賞者は学会HPに掲載しています）。

懇親会はホテル日航金沢にて盛大に開催されました。参加者は料理や地元の銘酒を囲みながら親しく歓談し、学術セッションの延長としての議論から、普段はなかなか聞けない近況や研究以外の話題まで、和やかな交流が広がりました。しばらくの歓談の後に始まったのが、けん玉パフォーマーとして知られる加藤兄弟のステージです。息の合った技の連続に会場からは驚きと歓声が上がり、学会参加者が一体となって盛り上がる時間となりました。続いて行われた「けん玉チャレンジ」では、各大学や施設からエントリーしたチームが次々に技を披露し合い、日本医大武蔵小杉チームBが見事に優勝を飾り、大きな拍手に包まれました。さらに、紅白歌合戦を模した「けん玉・三山ひろしチャレンジ」では、普段は学会発表で真面目な表情を見せる先生方が、舞台上でけん玉に挑む姿が見られました。意外な一面に会場からは笑いや歓声が巻き起こり、世代や所属を超えた交流が自然に生まれた瞬間でもありました。懇親会は単なる余興にとどまらず、学術と人間関係をつなぐ大切な場として、参加者にとって忘れがたいひとときとなりました（図3）。



図3：懇親会：三山ひろしチャレンジ

最後に、今回の学会を主宰校の一員として、白内障学会・水晶体研究会役員の皆様、講演者・座長の先生方、そして学会運営を支えてくださった教室員の皆様（特に事務局長の初坂奈津子先生）に心より感謝申し上げます。また、寄付を賜った金沢医科大学同窓会ならびに関連病院の皆様にも厚く御礼申し上げます。今回の総会が無事に成功裏に終わられたのは、多くの方々のご尽力の賜物です。ここに深く感謝申し上げます、本学会報告を結びとさせていただきます（図4）。



図4：学会スタッフ集合写真